
噂につられ

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

噂につられ

【Nコード】

N1578D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

夜の学校に化け物がでるといふ噂が。それを聞いたクラスの面々が集まって学校の中に入ってみると。一見ホラーですが実は。

第一章

噂につられ

よくある話だが今この街では所謂都市伝説が流行っている。皆顔を合わせればその話をしてばかりだ。そのせいで何か学業まで忘れられているふしさもある。

「今度はあいつが見たのかよ」

「ああ、そうらしいな」

噂話だが誰が見たのか誰が会ったとかそういう話になっている。こういう話の常で実際に見た人間はいないのだがそれでも話題でもちきりだった。

このクラスでもそうだった。皆教室のあちこちで話をしている。

「昨日も出たらしいわ」

茶髪を上で束ねた少し肌の焼けた女の子が言う。グレーのブレザーとスカートをかなりラフに着ている。この娘の名前を新条朝香という。クラスのムードメーカーと言っている。

「それも学校に」

「それは嘘でしょ」

彼女の向かいの席に座る黒い髪を長く伸ばして濃い黒のアイシャドーをつけた女の子がそれを聞いて笑う。朝香の友人で名前を樋山玲子という。所謂悪友だ。

「幾ら何でも」

「いえ、本当に出たらしいのよこれが」

朝香はその玲子に真顔で言う。

「校庭にね。真夜中に」

「本当に!？」

「見たって人もいるし」

よく出る言葉だ。実際に見たのは誰かというとはつきりしない。こつした話はそもそも最初に誰が言ったのかすらわからないのだが

今回もそうであつた。

「本当よ」

「そうなの」

「そうなのよ。それでね」

朝香は真顔で玲子に話す。彼女は本気で信じているようである。

「十二時にいたらしいのよ」

「十二時にねえ」

玲子も信じるようになった。朝香が嘘を言っているのではないということはわかるからだ。少なくとも朝香本人は本当のことを言っているつもりなのである。

「それでにたにた笑っていたらしいわ」

「うわっ」

玲子はそれを聞いて思わず身体を引いた。同じく心も引いていた。

「それはまた」

「どう？これでわかつたでしょ」

あらためて玲子に問う。

「出たつて」

「ええ。本当に何処にでも出るのね、あいつ」

「妖怪だからね」

朝香は言う。

「何でもずつと昔からこの街にいるらしい」

「それも本当なの？」

「ああ、そうらしいな」

朝香の右手、玲子の左手から男の子の声がした。そこには一人のすらりとした長身の男の子が立っていた。青い詰襟のこの学校の制服をきちんと着ている。彼の名を浜中賢治という。

「浜中君」

「御爺ちゃんから聞いたんだ」

賢治は玲子の声に応える形で述べた。

「御爺ちゃんが子供の頃から出ていたつて」

「そうだったの」

「ねっ、本当だったでしょ」

朝香はここぞとばかりに玲子に対して言う。

「昔からいるのよ。これが」

「何か夜出るのが恐くなつたわ」

夜に出ると聞いて身震いする玲子であった。

「バイトがあるのに」

「逃げればいいじゃない」

朝香は軽い調子で彼女に言った。

「会ったら」

「無理よ」

玲子は顔を顰めさせてそれを否定した。

「だってあれでしょ？」

「あれって？」

「あいつ百メートルを三秒で走るのよね」

「ええ」

こうした都市伝説ではつきものであるが相手は異常に動きが速い。バイクよりも速い速度で追い掛けてくるといふ話もざらなのだ。この時もそうだった。

「絶対追いつかれるわよ。そうして」

「頭からバリバリとね」

「冗談じゃないわよ」

玲子はその整った口を尖らせて言った。

「まだ食べられたくないわよ」

「あたしはずっとよ、そんなの」

朝香もまた口を尖らせて述べた。

「食べられない人間なんてそもそもいないわよ」

「そりゃそうだ」

賢治は朝香のその言葉を聞いて思わず笑った。

「僕だってそうだし」

「そうよね。けれど出るんだ」

「そこよ」

朝香は玲子の言葉に突っ込みを入れた。

「出るのよ。見たいような見たくないような」

「ちよつと朝香」

玲子は今の朝香の言葉に顔を露骨に曇らせてきた。

「あんた今何て言ったのよ」

「だから見たいような見たくないようになって」

朝香はしれつとして答える。

（そう言ったんだけれど）

「ちよつと、冗談じゃないわよ」

玲子はまた口を尖らせた。それでまた言うのだった。

第二章

「あんた食べられたいの!? 冗談じゃないわよ」

「いや、まあ怖いもの見たさ」

朝香は少し笑って述べた。

「どうか、それ」

「馬鹿じゃないの、本当に」

殆ど本気で怪物の存在を信じている玲子にとってはまさにそんな話であった。口を尖らせたまままた朝香に対して言うのであった。

「わざわざ死に行くようなものじゃない」

「そこまで言う?」

賢治は玲子の話を聞いて言う。

「言い過ぎじゃないかな」

「とにかく私は嫌よ」

きつぱりと言い切ってきた。

「食べられるのなんて」

「食べられる食べられないって何なんだよ」

それを聞いてまた一人やって来た。茶髪で無精髭を少し生やした大柄な男だった。田中伸介である。クラスでは派手好きな遊び人で知られている。

「お菓子か何かの話かよ」

「それが違うんだ」

賢治が彼に応えた。

「違うって?」

「ほら、あの化け物」

これだけで話を通じる。思えばそれだけ皆が話しているというところである。

「出たじゃない、学校の校庭に」

「ああ、そうらしいな」

それは伸介も聞いていた。それで話に頷くことができたのだ。

「で、それがどうしたんだ？」

「何か新条さんがさ。見に行きたいらしいんだ」

「へえ」

伸介はそれを聞いて声をあげた。そこには特に感情は見られない。

「そうなんだ」

「冗談じゃないわよね」

玲子は同意を求めようにして伸介に顔を向けた。表情からもそれがわかる。

「食べられに行くなんて」

「それは少し早合点じゃねえのか？」

だが伸介は玲子のその言葉に同意せずにごう言っのだった。

「早合点って？」

「いきなり食べられるっていうことがだよ」

玲子に対して言った。

「そうそう有り得ないだよ、幾ら相手がバイク並のスピードで走ってもな」

「けれどこの前捕まった隣町の中学生がバラバラにされて食べられたじゃない」

こうした都市伝説にはつきもの話だ。誰彼が食べられたのだのその話が出て来るのだ。ことの真意は不明なのは常である。

「そんなのに会いに行くなんて」

「だったらあいつ連れて行けよ」

玲子のそんな言葉を聞いて伸介は側にいる男のクラスメイトを一人指し示してきた。

「あいつって？」

「鈴木だよ」

一見目立たない地味な生徒を指し示したのだ。彼の名を鈴木勝也という。

「あいつなら問題ないだろ」

「まあね」

玲子もその言葉に頷けた。何故なら彼の家は化粧品店だからである。そこに大きな秘密があるのである。

実はその妖怪は香水の匂いが苦手なのだ。噂によると香水をジュースと間違えて飲んだことがあるかららしい。妖怪の好物はジュースなのだ。

「どうだい、あいつ連れて行ってさ」

「そうね。ねえスズ」

朝香がその勝也に声をかけた。勝也はすぐにそちらに顔を向けた。

「何？」

「今夜暇？」

いきなりぶしつけな質問だった。

「暇って？」

「だからさ。今夜ここに来れる？」

「うん、まあ」

勝也はすぐにそう答えた。

「来れるけれど」

「よかった。じゃあさ、香水たっぶり持って来てよにこりと笑って彼に言った。

「香水っていうとあれ？」

「そう、あれ」

またしてもにこりと笑っての言葉であった。

「学校に出たしね」

「らしいね」

「ああ、あんたも知ってるのね」

それを聞いて話が早いと心の中で笑う朝香であった。

第三章

「じゃあ話が早いわね」

「僕も来いってことだよな」

「そういうこと」

笑う朝香の隣ではまだ玲子が懨然としている。

「どう？それで」

「僕は別にいいけれど」

「何でそう言うのよ」

玲子は勝也が頷くのを見て懨然とした顔で言った。

「そこで。はいそうですかって」

「だって面白そうだし」

これが勝也の返答であった。言うまでもなく玲子が待っていた返答ではない。

「だから僕もって思っで。皆も行くんだよな」

「ああ」

「そのつもりだけれど」

伸介も賢治も笑顔で応える。見れば笑っていないのは玲子だけであつた。

「ほら。皆もだし」

「あつきれた」

玲子はそれを聞いてあらためて溜息をつくのだった。

「わざわざ食べられに行くなんて。何考えてるのよ」

「だからそうとは限らないでしょ？」

「そうだよ」

そんな彼女にまた朝香と伸介が言う。

「香水たっぷり持って行けばいいじゃない」

「それでも心配ならジューズ持って行けばいいだろ」

伸介の言葉には裏があつた。妖怪はジューズが大好物なのでそれ

が置かれていると人を追い掛けるのを止めてそのジュースを一心不乱に飲むのである。思えばこれもまた非常に奇妙な習性であった。妖怪ならではと言うべきであろうか。

「それでどうだ？香水と二本立てで」

「つまりそこまでして行きたいのね」

玲子は無然として言う。

「要するに」

「当たり前よ」

「なあ」

朝香と賢治が頷き合って言う。

「わかってるんじゃない、あんたも」

「わかりたくてわかっているわけじゃないわよ」

玲子はむっとして述べた。嘘を言うつもりはなかった。

「こんなの。やっぱり私も？」

「だから香水持たせてあげるから」

朝香は玲子にそう言って宥める。

「それで充分じゃない」

「何なら大蒜とか十字架も持って行くか？」

「それは妖怪が違うから」

これについてはすぐに断った。吸血鬼ではないからだ。

「別にいいわよ、それはね」

「で、行くのよね」

「ええ」

無然として答えた。断れなかった。

「断っても連れて行くんでしょ、どうせ」

「その通り」

「じゃあ行きましょう」

「出て来たら真っ先に逃げるから」

玲子是不機嫌そのものの声で呟いた。

「じゃあ香水かけたらいいじゃない」

「ねえ」

伸介は勝也のその言葉に頷いた。これもまた玲子にとっては余計な一言だった。その言葉にすぐ顔を顰めさせたからわかった。

「じゃあもらえる？夜」

「うん」

何はともあれ五人で真夜中の学校に行くことになった。校門に辿り着くと既に完全に閉められてしまっていた。五人はその前にそれぞれ私服で集まっていた。

「何だ、閉まつてるじゃない」

玲子は閉じられた校門を見て少し嬉しそうな顔を見せてきた。

「残念ね」

「って何処が？」

するとすぐに朝香が突っ込みを入れてきた。

「入ればいいだけじゃない」

「閉まつてるじゃない」

「よかつたわね、その格好で」

だが朝香は今の玲子の服装を見てここで楽しそうに笑ってきた。

まるでその服装に何かがあるような表情であった。

「格好って？」

「ズボンで。あたしもだけれど」

「!？」

「だから」

自分の服を見て目をしばたかせる玲子に対してまた言ってきた。

「動き易いじゃない。それに中も見えないし」

「俺にとっちゃそれが残念だけれどな」

賢治はその朝香の横でかなりセクハラ親父めいた笑いを見せてきていた。

「それが楽しみで来たんだしな」

「話がわからないんだけど」

玲子は目をしばたかせたまままた言うのだった。

「何なのよ、ズボンって」

「だから」

朝香は親指で校門を指し示してきた。そうしてまた述べる。

「越えるの、校門を」

「乗り越えるって!？」

「そうよ。決まってるじゃない」

にやりとした笑みでまた玲子に言う。

「わかったわね。じゃあ今から」

「そこまですて妖怪を見たいの」

「だから香水あるから」

勝也がかさず香水を出してきた。

第四章

「ハイビスカスの香水。どう？」

「つまり中に入るのね。絶対に」

「今更つて気もするけれど。その言葉は」

伸介が突つ込みを入れてきた。

「とにかく行くわよ。いいわね」

「わかつたわよ」

玲子はそのハイビスカスの香水をたつぷりとかけてから校門を乗り越えた。真夜中の学校の中は完全に静まり返っていてそれだけで不気味なものがある。今五人はその中に潜入したのであった。まずはその不気味な沈黙が彼等を出迎えたのだった。

校庭もそうであった。校門からすぐに校庭であつたがそこにあるのは何もなかつた。そこにいるのも朝香達五人だけであつた。

「誰もいないわね」

「今のところはね」

朝香が玲子に答える。

「けれどすぐに」

「変なこと言わないでよ」

玲子は朝香に対して言い返した。

「本当に出て来たら」

「それが面白いんじゃないか」

賢治は玲子の言葉を聞いて楽しそうに言ってきた。

「鬼が出るか蛇が出るかってな」

「妖怪がね」

伸介もそれに続く。

「出るのかな、本当に」

「噂が本当だつたらね」

勝也も言った。

「出るかもね。そうしたら」

「出ないに決まってるじゃない」

今の玲子の言葉は完全に願望であった。出て欲しくはないという。

「そんなの」

「そんなこと言ってるよ出るのよね」

「そうそう」

その玲子の言葉に朝香と賢治が突っ込みを入れる。

「大抵ね」

「それも後ろから」

「えっ!？」

今の賢治の言葉にびくつとした玲子は慌てて後ろを振り向く。だが幸いにしてそこには誰もいなかったし何もなかった。彼女はまずはそのことにほっと安堵するのだった。

「よかった、いなかったわ」

「怖がりねえ、本当に」

「仕方ないじゃない」

からかってくる朝香に言い返す。

「何が出てもおかしくない状況だし」

「だからそれを見る為にここにいるんだろ？」

賢治がまた玲子に言う。話しながら辺りを見回す。

「まあ今は何も見当たらないけれどな」

「そうだね」

伸介は周りを懐中電灯で照らしながら見回していた。

「いないね。何も」

「こっちも」

勝也も懐中電灯を使っていた。しかしそれでも何も誰も見当たらないのだった。

「校舎は………何もないか」

「そっちは聞いていないわ」

朝香が勝也に応えた。

「だから別にいいんじゃない？」

「そう。それじゃあ」

「そっちはいいってことで」

二人は朝香のその言葉に頷く。玲子は校舎に入らないと聞いていささか嬉しそうであった。

「まああの中は必要ないしね。入ったらもつと怖いし」

「本音出てるわよ」

今度は朝香が突っ込みを入れる。どうにも素直な玲子であった。

何はともあれ校庭を見回す。すると。

「んっ!？」

最初に気付いたのは伸介であった。

「何かいる!？」

「えっ!？」

それを聞いた玲子の顔が本当に一変した。

「嘘でしょ、それ」

「いや、今」

「あれっ、何処!？」

それを聞いて勝也も尋ねてきた。

「何処にいるの？」

「ここだったんだけど」

伸介はすぐにある場所を懐中電灯で照らした。それを見て勝也もそこを照らす。

「ここ?」

「うん。さっき何かいたよ」

「嘘、それって」

「かもな」

怯えだす玲子の横で賢治が楽しそうに言う。

「いよいよ。出たか」

「ええ。妖怪が」

朝香も楽しげな声であった。だが玲子は全然違っていた。

「冗談じゃないわよ、そんなの」
ムキになつてまで言う。

「いたらどうするのよ。まして真つ暗だし」
「だから落ち着きなさいって」

朝香も懐中電灯を出してきた。賢治も。彼は元々夜目が効くのか
今まで懐中電灯を出さずに辺りを見回していた。だがここで遂に出
してきたのだ。

「香水たっぷりかけてるのに」

「それはそうだけれど」

「いざとなつたらこれもあるわよ」

朝香はそう言つてジュースのペットボトルを出してきた。かなり
甘いことで有名なジュースである。

「これがね。だから安心よ」

「安心していいの？」

「だから怖がることはないのよ」

完全に怯えた顔になつてゐる玲子に対して言う。

「わかたわね。じゃあ」

「わかつたわよ。それじゃあ」

玲子もその言葉に頷くことにした。そうして彼女も懐中電灯を出
して辺りを見回す。すると本当に何かが見えたのであつた。

「やっぱり………いる」

「みたいだね」

伸介も言う。

「何かな。まさか」

「そのまさかかもね」

また朝香が楽しそうな声をあげる。

「だつたらどうする？」

「じゃあこれ」

勝也はすぐに香水を出してきた。それを皆に手渡す。

「用心にね。これで大丈夫だよ」

「ああ、そうだな」

賢治は相変わらず余裕の態度であった。

「玲子ちゃんもどうだい？」

「私はもうかなりかけたけれど」

周囲を必死に見回りながら答える。

「だから別に」

「それでこんなに怖がってるのかよ」

「悪い!？」

顔は向けずに声だけで問う。声に陰が籠っていた。

「それが」

「だから気にし過ぎだって」

「ねえ」

また朝香も言う。

「出るわけねえだろ」

「それで何でここまで怖がるのよ」

「怖いからよ」

言い訳になっていないが理由にはなっている見事な言葉であった。

「そういうのが」

「やれやれ」

朝香はそんな玲子の言葉を聞いて肩をすきめてみせてきた。

「そこまで言うのね。困ったわ」

「けれどさ」

伸介は相変わらず辺りを懐中電灯を使って見回している。その中

で言ってきた。

「何かいるのは間違いないみたいだし」

「だとすると何かな」

「そうだな。そろそろ完全に馴れたみたいだしな」

賢治は急に自分の懐中電灯を切ってしまった。そのついで言ってきた。

「もつこれはいらないな」

「どうしたの!？」

「見えてきたんだよ」

目を細めて辺りを見回しながら言う。

「完全にな。辺りが」

「あんた夜目が利くのね」

「そういうことさ」

朝香に答える。

「俺はもうこんなのはいらねえ。そっちの方がはつきり見える」

「それで何が見えるの？」

玲子は恐る恐る彼に尋ねた。彼女は必死に懐中電灯を動かして辺りを見回している。

第五章

「いるの？本当に」

「ああ」

「ひっ」

彼が肯定の言葉を出してきたのでいよいよ声が怯えた。

「何！？じゃあやっぱり」

「ほら、こつちだ」

急に何か誘い出した賢治であった。

「こつち来い。ほら」

「ちよつとあんた」

玲子は彼が誘っているのを見て慌てて止めようとする。

「何寄せてるのよ。そんなことしたら」

「だから安心しろって」

それでも賢治の声は落ち着いたものであった。

「見えねえのならそれでいいからさ」

「いいからって」

「よし」

ここで鞆から何かを出してきた。それは肉のようであった。

「それ何？」

「夜食に持って来たんだ」

こつち玲子に答える。

「ビーフジャーキーさ。丁度よかったぜ」

「よかったって何でよ」

玲子は今の賢治の言葉に首を傾げさせる。

「妖怪なんか寄せて」

「本当に妖怪だと思つか？」

賢治は楽しそうに笑ってまた玲子に言ってきた。

「本当に」

「何が言いたいのよ」

「ん！？じゃあ」

「これかえって邪魔かな」

賢治の様子を見て伸介も勝也も懐中電灯を消してしまった。続いて朝香も。

「あたし達も何か見える頃かしら」

「ああ、馴れてきたんじゃねえの？」

賢治は彼等にも言う。既にビーフジャーキーを手に屈んでいる。

「そろそろさ」

「それで何がいるのよ」

玲子は怪訝な顔で賢治に問う。

「妖怪にそんなものあげて」

「何で妖怪に！？」

しかし賢治の返事は何を言っているんだといった感じであった。

「ビーフジャーキーなんてあげるんだよ」

「それじゃあ何よ、一体」

「懐中電灯は止めてくれよ」

賢治は笑ってこう言ってきた。

「頼むからな」

「！？何で？」

玲子にはわからない言葉だった。

「妖怪なんでしょ、それなのに」

「だから妖怪じゃないわよ」

横から朝香がクスクスと笑いながら言うのだった。

「そんな物騒なのじゃ」

「わからないんだけれど」

玲子は朝香のその言葉を聞いてさらに首を捻った。

「妖怪じゃなかったら何よ」

「もう少しじゃない？」

また横から言う者がいた。伸介であった。

「そろそろ樋山さんも」

「そうだね」

「そうだねって」

勝也も頷いたのでついつい問うた。

「だから何なのって。さっきから全然わからないし」

「猫よ」

くすくすと笑いながら朝香が答えてきた。

「猫がいるのよ」

「猫!？」

「そろそろ見えてきたでしょ」

夜に馴れてきたのではと言われた。

「目が。どう?」

「そういえば」

言われればそうだ。目が結構馴れてきた。そうすると賢治がその

ビーフジャーキーを猫にあげているのが見えた。見れば黒猫である。

「よしよし」

「じゃあ校庭に出た妖怪って」

「そうね、この猫だったみたい」

朝香はその黒猫を見て言う。こうして種がわかれば実に何でもな

い話だった。

「意外だった?」

「ええ」

玲子は朝香のその言葉に頷く。

「本当に何が出るかって思ってたから。けれど実際は」

「猫一匹。けれど」

「ここで勝也が言う。」

「この猫ノラ猫みたいだね」

「ああ、そういえば」

伸介が彼の言葉に頷く。見れば首輪がない。それによく見れば毛並みも乱れている。そうしたところを見ていけばこの猫がノラ猫で

噂につられ

あるのがわかるのだった。

第六章

「ノラだね。確かに」

「ノラ猫なの」

それを聴いてふと表情を変えたのは玲子だった。

「じゃあ私が引き取っていい？」

「あんたが？」

「うん」

こくりと頷いて朝香に答える。

「うちの家族皆猫好きなのよ。何匹いても困らないって位に」

「妖怪なのがいいのかよ」

賢治が今の玲子のその言葉を聞いて笑いながら言ってきた。相変わらずビーフジャーキーをやり続けている。猫はそれを美味しそうに食べている。

「それでも」

「ええ、いいわよ」

玲子はくすりと笑って賢治に言葉を返した。

「喜んでね」

「じゃあ妖怪は玲子に無事退治されたと」

「それで終わりだね」

朝香と勝也が楽しそうに言う。

「それじゃあさ。話は終わったし」

「ええ」

玲子は今度は伸介の言葉に頷いた。

「帰りましょう」

「そうだな。丁度ビーフジャーキーも食い終わったしな」

ペロペロと前足を楽しそうに舐めていた。それを見れば猫が機嫌がいいのがわかる。猫でも何でも美味しいものを食べれば機嫌がいいのが当然だった。

「ほらよ」

「有り難う」

玲子は賢治から猫を受け取った。その猫を優しく抱き締める。

「じゃあ猫は私かね」

「ああ、頼むぜ」

「それにしてもね」

朝香は嬉しそうな顔で猫を抱く玲子を見て苦笑いを浮かべるのだ。
つた。

「また随分と態度が変わうじゃない」

「だってね」

玲子はその如何にも嬉しそうな声で言葉を返す。

「猫だし。やっぱり」

「やれやれ。まあいいか」

「話は無事終わったしな」

賢治が立ち上がって言う。立ち上がると一旦腰を伸ばした。そうした動作が少し高校生のものには見えなかったが彼には似合っていた。
た。

「帰るか」

「うん」

「それじゃあ」

伸介と勝也がそれに頷く。こうして全てが決まった。

五人はまた校門を越えて学校を出た。玲子はずっと猫を抱いたままであった。

真夜中の道を五人と一匹で歩く。玲子はその中で四人に言うのだ。

「妖怪はいなかったわね」

「何か今更って言葉ね」

彼女の横にいる朝香が答えた。

「その言葉も」

「そうだけれどね。やっぱり」

それでも玲子は言うのだった。

「いるんじゃないかってビクビクしていたから」

「少なくとも学校にはいなかったってことだ」

賢治が言う。彼の言葉は短いがその通りだった。

「そうなるよな。猫がいただけで」

「ええ」

玲子は彼の言葉に応えて頷く。

「そうね。幸いなことに」

「けれどさ」

しかし伸介が言うのだった。

「ひよっとしたら他の場所で噂になっているのは」

「ちよっとそれって」

「わからないよ」

勝也も言う。

「そのところは。どうなのか」

「そうね。ひよっとしたら」

朝香が意地悪そうな笑いになっていた。

「今あたし達の後ろにも」

「変な冗談言わないでよ」

玲子はムキになってそれを否定しようとする。否定しようともいえる時は後ろにいるものだがそれでも否定するのだった。それは感情によるものだった。

「縁起でもないわ」

「まっ、そりゃそうだ」

賢治が玲子のその言葉に賛成して頷く。

「今更な。出て来られると」

「そうよ。ところさ」

玲子は猫を抱いたまま皆に対して言う。

「この猫の名前。決めない？」

「名前!？」

「ええ、名前」

また皆に言う。

「何がいいかしら」

「それは後でゆっくり考えようぜ」

賢治は猫を見ながら言う。

「時間はあるんだしな」

「そうね」

「そうだよ」

玲子にも言い返す。二人は笑顔になっていた。

「折角会えたんだしな、妖怪に」

「ふふふ、妖怪にね」

そういわれると笑顔になる。二人だけで泣なく他の皆もいい雰囲気になっていた。噂につられて校庭にやって来て出会ったのは一匹の猫だった。その猫に今大切なものを与えられたのだった。そうは見つからない大切なものを。

噂につられ

完

2007・9・26

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1578d/>

噂につられ

2009年3月24日09時22分発行